
つきかけ

ik_brtr

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つきかげ

【Nコード】

N41940

【作者名】

ik|brtr

【あらすじ】

佐助とお市。何故か。

(前書き)

BASARA3とか、HERO・S長政様ストーリーはとりあ
えず無視してます再び。

「がああああああああああああ！」

もう一度さつきいた木の根元に飛び込む。降り積もった雪が緩衝してくれたおかげで大して痛くはない。しかしさらさらと手応えのない雪に足を取られたその一瞬で、巨大な手に頭を掴まれ、幹に叩きつけられた。しまったな！こないだ苛めすぎたかな！。根に持たれてるかな！…根に持つどころじゃない気はするけど。

点灯する視界の中で、今度はまるでわかいおんなのもののように細くて華奢な黒い腕が、ニヨキニヨキと伸びてこちらに向かってくるのが見えた。逃げようにも足が言うことを聞かない。当の本人はやや開いた蕾の中で首をぐるりと回しながらまだ至極当然のようになぎやーぎやー喚いている。細い指が服越しに首に触れた。絞める気か？鋼が入っているから大丈夫だと思っただがどういうわけか服をすり抜けて首に触れた。細い指。きつと同郷のあの忍びの指なんかよりもっともつと細い。あいつは以外に手ゴツいからな…いやいやいやそんなこと考えてる場合じゃないんだけど

「あ、ぐ」

肉もすり抜け、そのまま気の管を締め付けられているように、きゅうと息が止まる。あ、これまずいな。視界が目の端から砂嵐にかわる。落ちる…かも。これは。まずいな…烏達は寒いのを好まないから、気を使って置いてきてしまった。あー…あー…赤いな景色が。

細い指がうねうねもごもごと動き出した。よく動いて絡みつく女の中みたいに。すこしずつ空気が入ってくる。こめかみの脈が落ち着く程ではないけれど。しびれた指がようやくと腰の苦内にとどく。あたるといいな、まあ駄目もとだよね位の軽い希望を込めて魔王の妹めがけて投擲した。残念ながら、細い腕が俺の首から離れてずるりと苦内を取り込んだだけで終わった。手のひらの部分に刺さっ

て、そのままゆっくりゆっくり、やわらかい穴の中にずぶずぶと埋まっていくように。また首を絞めに戻って来るのかと思っただけど、魔王の妹が空に伸ばした真っ白い両手と恋人つなぎをしに戻ってしまった。あれはなんなんだ？

「いつまでそうやって遊んでんの」

念の為、何が来ても対応できるように大手裏剣を左に構えておく。最もあの黒い手に貫通されたら、というか取り込まれたらあんまり意味がないけど。

「遊んでなんかいないわぁ…ふふふふ…嗚呼おかしい…」

ひとときわ大振りな黒い手が、猫をかわいがるように魔王の妹の頭をなで、あごの下をくすぐる。結ばった両手をそのまま胸の前までおろして、目を細める魔王の妹は、たしかに遊びに興じている様に見えるのだが。

「だいたいあなたは、何をしにきたの？」

「別に、只の偵察。」

「うそ。嘘は悪。いけないこと。滅ぼさないと、ね、ながまささまうなずくように大きな手が指を一本伸ばし、重く垂れた髪を掬い上げてなでた。吐き気がする。自分だけ悲しいみたいな、そんなかんじのこの女に。」

「世の中にはさ、必要悪つてのもあるんだよねー。」

「そんなものないわ。ながまささま、そうよね、ふふ、ふふふ、あははおかしいのよこの百足ったらふふふ長政様ふふふふふふあははああああながまささま長政様長政様ながまささまあああああ

ああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ

先程までじゃれていた大振りな手の掌にひょいと乗った魔王の妹は、そのまま雑刀を振りかぶるとこちらに落下してきた。物理的な攻撃でありがたい。更に言うとな身のこなしがトロくてありがたい。一歩下がって右手も左手も振りかぶって

どっ

骨が軋んだ。向こうで魔王の妹もぼかんとしている。大きな手が、俺の胴体を後ろの大きな木ごと掴んでいる。はあ。何これ自動なの？操ってるもんだっててつきり。

「なが、まささま」

内臓が血管が肋が肺が締め付けられる。首絞められるのは実際（上手ければ）勃つこともあるしイクこともあるけど、さすがにここまですでに広範囲でいろんな臓物ごと絞め付けられると、ちよつと、ちよつと。

「ながまささま、ながまささま？ながまささま、なの？ほんと、に？」

ああそうか。

「あんた、……こいつを自分の旦那だと」

「ながまささま、かえって、きてくれたの！？ながまささま、長政様！？」

「信じてなかったんじゃないの。…やっぱり」

「長政様、ながまさ、さま、市、市、市、嗚呼」

何だよ結局遊びじゃねえか。

地面に這いつくばってしまつた女の目から、見る見るうちに涙が溢れ出す。その目は先程までの様な空洞は宿っていない。はれた真冬の星空のような、想い人を待ちわびていたこいする少女の瞳だ。そんな目をみたのははて、さて、多分あのじゃじゃ馬がさいごだと、思うんだけど、痛い

「か、んどうの、再会に、喜んでるとこ悪いんだけど」

ぐぐ、と黒い手を下に押し込む。帯を腰に落とすときのように。すり抜けないで良かった。手裏剣はそのまま腰へ。そのまま自分の分身をひねり出す。黒い手に吸収されるかと思つたけど、存外上手くいった。ただ若干不安定なのか、ゆらりゆらりと闇が漏れ出て揺れてしまう。ちゃんとしろ俺様。何とか2体、大丈夫。ダイジョブダイジョブいけるいける。女の子座りでえぐえぐしゃくり上げてる魔王の妹本当に鬱陶しいんだけど。

「この玩具、貰っていくよ」

影分身を黒い手に少しずつ潜り込ませる。一人に一つの影法師も、仲良く二つ並んだ影法師になればどこからどこまでが自分の影かわからなくなる。それと同じ事。ぐぐ、と影分身に黒い手が引きずり込む。身の中で反抗するように、無理矢理に膨れ上がる感触。黒い手が反抗しているのか冷えきっていた身が、流れ込むにつれて内側からカツと熱くなる。どろりどろりと、影分身と黒い手の境目がとろけて粘り、摺り合わせられて、内腑の神経に直接繊毛がからむような感覚に全身の毛が逆立った。

「なに、なにをしてるの」

目の端が痙攣する。影分身がぶわっと泡立つ。集中をすこしでも削ぐとこれだ。少しずつ、焦らずに、全部飲み込んでしまわないと。吐かないように。息が苦しくて口を開けた。舌が出る。あまりに大きいもんだから、涙が、目に溜まる。

「やめて！嫌、嫌、やめて！」

遅えつての。結構飲み込めたのか、手と身の間にスキマが出来た。体を揺らすと吸い込むだけ吸い込んで凝り固まった闇が、つま先から脳天にまでマワる。砂を詰めた瓶を揺らしたら少しスキマが出来るあの道理。人間なんて筒だもの。うわあ。いけないねえこの感覚。快感とは言わないけど。

「つれて、いかないで！嫌、いやあ！」

少しは納まりが良くなったからか、吸収する早さがあがる。こめかみが先程とは違う意味で脈打ち出した。魔王の妹が完全にへたり込んで攻撃してこないのが幸いだね。あの泣き声が、やんでくれると良いんだけど。

「ふ、あ、……ああ……」

この世の物でもなくせに、まるで粘液にまみれたようにぬるりと黒い手が尻尾まで飲み込まれた。おもわず声が漏れる。さすがに大きいのを飲み込みすぎて、腰が砕けてしまう。膝が笑う。体の中がひくひくと蠢く。暗い蕾の中でめそめそと泣くおんなにどんな残酷な事を言っただろうかと思っただけ、めんどくさくなって、やめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4194o/>

つきかけ

2010年10月20日23時39分発行